

# ショート小説

ayaneko828

## 自分勝手な人

---

「あなたは自分勝手な人ね。」

口数少ない彼女が僕によく言う言葉だ。

「君は人の話を聞かない人だね。」

僕が先ほどの言葉に対して彼女に言う言葉だ。

確かに、僕は自分勝手な男であると自覚している。

君に相談もなく勝手に決めるし、それを事後報告しては君をあきれ顔をさせるのを得意としている。

だけど、君は君で問題がある。

僕が話しかけても上の空で聞いているし、相槌だって  
適当だ。

会話をしようとする気さえみられない。

結局、僕が一方向的に話しているだけである。

「あなたは自分勝手な人ね。」

僕を見つめながら彼女は言う。

彼女をうす目で見ると彼女の目から

涙が流れているのが確認出来る。

「君は人の話を聞かない人だね。」

だって、僕の悩みを上ので聞いてくれていたから。

手首から流れる血の生温かさを感じながら

僕は目を閉じた。

(終)

## かしこい猫

---

家に帰る途中の道で、前から猫がやってきた。  
自分を見て猫は「にゅあ。」と鳴いて近づいてくれた。  
野良猫だがその人懐こしさと可愛らしさに、自分は  
その猫を家で飼うことにした。

猫の名前を「タマ」と名付け、世話とタマと遊ぶ日々が  
続いた。

一緒に暮らす内にタマは賢いということに気がついた。  
トイレの場所を教えたらそこできちんとするし、壁に爪を  
といた時に叱ると2度としなくなる。  
よい猫を飼ったと思っていた。

ただ1つ気になることといえば狩ったネズミや虫を  
自分の所に持って来ることぐらいだ。

こればかりは叱ることも出来ないので、とりあえずは  
「偉いね。ありがとう。」と褒めることにした。  
それを聞いてタマは満足そうに「にゃあ。」と答える。

ある日、タマの帰りが遅かったため、心配しながら  
タマの帰りを待ち続けた。

夜中になってタマが帰って来た時はほっとしたものの  
その口にくわえていた物を見てぎょっとした。

タマがくわえていた物、それは変色している人の指だった。

いつものようにそれを自分の所に置き、自分を見つめる。

タマは本当にかしこい猫だ。

タマを会った日、自分が人を殺した帰りだということを知っていた  
のだから。

(終)

## 部屋の中の泥棒

---

仕事から戻ると知らない男が部屋の中を漁っていた。

その知らない男を見ながら、最近この辺りに連続殺人があることや泥棒が出没している噂のことを思い出した。まさか、自分がその被害にあうとは思ってもしなかった。

相手は私の動きをうかがっているのだろうか、あまり動こうともしない。

男の手元に金目の私物がなかったので、おそらくこの部屋の中に入ってそんなに時間は経っていない。

何もせずに早くこの場から出て行って欲しいこと、警察に通報しないこと、

それを伝え、私は隠していた通帳と宝石を机から取り出し、男の方に投げつけた。

男は了承したのか、それらを受け取り、部屋の中から出て行ってくれた。

それにしても泥棒をしに入った部屋の家主がすぐに帰ってくるとは、その男の運は悪いのではないだろうかと思ってしまう。

しかし、部屋の押し入れに隠してある死体を見つけなかっただけ、まだ運が良かったのかもしれない。

(終)

## 彼女と私

---

私と彼女が会ったのは、高2の時だった。

クラス内で隣の席に座っていた彼女とふとしたきっかけで話すようになり、気が付いたら友達になっていた。

帰り道が同じためお互いの都合が合う時は、一緒に帰るようになり、分かれ道になる所の近くで立ち止まり、話を続けていく。

分かれ道になる所の近くには崖があり、危険防止用の柵が立てられている。

その崖の柵の所で、他愛のない話を私たちは続け、別れを惜しんでいった。

ある日、あの崖の下で彼女が死んだ。

警察は彼女の死を自殺と判断した。

彼女の家の中の部屋の中に遺書があったからだ。

小さい頃、父が家に出てから母が自分に対して虐待を行うようになったこと。

身体を売ることを強要され、しなかったら家を出るを言われたため、仕方なく身体を売ってきたこと。

それに耐えきれなくなったこと。

そのようなことが遺書の中に書かれていた。

彼女の葬式が終わってから、彼女の家に行った。

初めて行くため、近所の人に聞きながら、その場所にたどり着くと、家の中には誰もいなかった。

おそらく、彼女の母は警察にいるのだろう。

私は元来た道に戻っていく。

戻りながら、私は彼女は自殺ではない思っていた。

彼女が生きていた頃、あの崖の柵の所で、彼女が遺書に書かれていたようなことを言っていたからだ。

そして机の中にいつ自殺をしてもいいように遺書が

あることもその時に聞かされていた。

それを聞いた次の日、私は彼女にある物を渡していた。

あの崖の柵から少し離れた近くに、私が彼女に渡した物があった。

彼女は柵の所でアレを落とし、柵の向こう側に転がったと思いあの柵を乗り越えた。

そして足を踏み外し、崖の下に落ちたのだろう。

あの彼女の話聞いた次の日、

「一緒にこの街から出よう。頼りない男だけど、君を守るから。」

指輪を渡し、こう伝えた。

彼女は泣きそうな顔で「ありがとう。」と言い、

その場で左手の薬指にはめるが、母に見つかると大変なのですぐに外し、その指輪をいつも持つようにすると私に伝えた。

拾った指輪を握りしめ彼女との思い出しながら、彼女と話していた崖の柵の所で泣いた。

(終)